

(国語科)

わかる・できるをめざした指導法の工夫

～めざす子どもの姿をさぐる～

―「困っている子」をつかみ、「困っている」ところをさぐり、指導法を工夫する―

大阪市立高殿南小学校 全教員 (研究主任 杉谷英広)

1. 研究テーマについて

① 「わかる・できるをめざした指導法の工夫」とは、どういうことか。

算数科に比べ、国語科は、児童が「わかったのか」「できたのか」がはっきりと現れにくい。国語科は分野も広い。そのどれにも、「わかる・できる」を保障することが学校の役割だと自覚し、それをどの児童にも保障していくことの大変さに向き合って、指導法を一つ一つ工夫していくことが本年度の研究の出発点である。

② 「「困っている子」をつかみ、「困っている」ところをさぐり、指導法を工夫する」とは、どういうことか。

本校では、職員会議の最後に各学級の児童のことを話す時間を設けている。その時に、何度も名前が出る子どもがいる。このような子どもは、「困った子」と考えられやすいが実は「困っている子」なのではという「発達障がい」専門のドクターから学んだ視点が「困った子は困っている子」なのである。この方針は、本年度、「子どもを理解するための講演会」という形で実を結んだ。

算数科研究で、「困っている子」をつかむ方法が究明され、高殿南方式といえる指導案の児童の実態の分析法を確立されていった。①算数科の研究でつくり上げてきた「困っている子」をつかむ方法が国語科でどう引き継がれるのか研究をする②「困っている」ところをさぐって指導法を工夫する。

③ 「めざす子どもの姿をさぐる」とは、どういうことか。

- ・各学年で年度当初に、1年間でめざす国語科の子どもの姿を明文化して確定する。
- ・研究授業のみでなく、1年間の実践を最初に設定した子どもの姿から検証していく。
- ・研究授業は、学年でめざす子どもの姿へむけての1年間の研究・実践の過程として捉え、研究討議を行う。

2. 研究実践（5年生の取り組み）

○ 単元名 物語の主題を考えよう(1)

○ 教材名 物語教材「注文の多い料理店」宮澤賢治

○ 目 標 作品の「構成」「題材と中心題材」「クライマックス」の分析を通して、主題を読み取る。

- ・「起承転結」「事件」「題材・中心題材」「クライマックス」について理解できる。
- ・作品に関して自分の考えを持ち、自分たちの討論で授業を進めることができる。
- ・「注文の多い料理店」の主題を自分の読み取りをもとに考えることができる。

○ 5年生のめざす子どもの姿 ～ 生きる力としての国語力を身に付けた子ども現在の5年生の子どもにとっての「生きる力としての国語力」とは、次とする。

「聞く力」 相手と自分の考えの違いを聞き取ることができる力

「話す力」 相手に自分の状況と意見を伝えられる力

「読む力」 A 説明書を読み取り新しいものの使い方がわかる力

B 小説等を生涯楽しんでいける力

C 自分の生きる手本を書物の中から学びとれる力

「書く力」書くことで自分の頭の中を整理することができる力

- 研究仮説① 困っている子どもの思考力・判断力・表現力を育てる教師のしかけ
 - ・ 起承転結の二重構造を扱う発問・指示の工夫
 - ・ 「しんし」の「おろかさ」で作品をまとめていき、それを「人間のおろかさ」と転換させる発問・指示の工夫
 - ・ 討論の授業形態

研究仮説② 児童の実態から考える困っている子がわかる・できる指導法の工夫

算数での研究を受け、困っている子どもをつかむ 11 の方法を考えた。A 国語の単元末テストの素点 B 学習の様子から C 学習に関する実態調査(アンケート)から D ノートの様子から E 音読の様子(すらすら読めない)から気になる児童 F 漢字の習得で気になる児童 G 話すことに関して気になる児童(発表が苦手) H 作文が苦手な児童(日記が短い等) I 聞き取りに関する調査 J 発達障がい の観点から K 視覚空間認知ワーキングメモリー、聴覚ワーキングメモリー、言語意味ネットワーク、裏の意味の理解に関する実態調査から

- 「困っている」ところをさぐる
 - ①長文のため内容が把握できない。 ②読めない漢字、わからない言葉が多くあり、結果として物語の世界に入れない。 ③討論などのために自分の考えを書くことができない。 ④討論などで自分の意見を発表することができない。 ⑤学習のまとめの作文を書くことができない。
- 「困っている子」がわかる・できる指導法の工夫
 - 「困っているところ」をさぐるの各項目について指導の工夫を示す。
 - 「①長文のため内容が把握できない。」について
 - 音読を 10 回することを明確な目標としてあげる。確認をして読んだことをほめていく。話し合いでどこをとりあげているのかわからなくなならないように確認を多く入れるようにする。(②～⑤以下略)

3. 研究のまとめ

- 研究の成果
 - A 5 年生の子どもの作文「国語の学習について」
 - B 発達障がいの視点を国語科に取り入れることの有効性の証明
 - C 国語科の「子どもをとらえる方法」の開発
 - D 「めざす子どもの姿」を設定することで 1 年間の実践を迫るようになったこと
- 今後の課題とその解決の方向
 - 課題 A めざす子どもの姿が各単元、各時間の指導から離れている。
 - ⇒ めざす子どもの姿を「話す・聞く」「読む」「書く」のそれぞれに設定し、それをまとめる形で各学年の 1 年間めざす子どもの姿を示す。
 - 課題 B 「教科書のてびき」をなぞる授業では、子どもの思考力・判断力・表現力が伸びない。
 - ⇒ 教師が教材に必死に向き合い、子どもに国語力が付く教師のしかけを考えていく。
 - 課題 C 研究仮説が設定されていない。
 - ⇒ 「教師のしかけ」と「発達障がい対応の留意点」の 2 つの研究仮説をあげて全学年の研究授業を行う。